

文字改革についての対談

——1978年12月訪中ノート——

細 川 廓 真

I. 文字改革をめぐる

12月6日（水） 午後

北京大学にて。 約1時間半

季羨林副校長（文字改革委員）

嚴紹璽中文系教授

胡双宝中文系教授

12月7日（木） 午後

北京飯店にて 約3時間

喬風（文字改革委員会研究組負責人）

申堅（文字簡化組負責人）

孫建一（簡化研究人員）

12月8日（金） 晩

北京烤鴨店にて

特に呂叔湘（語言研究所所長）と隣席にて自由
対談

12月14日（木）

武漢大学

周大璞（中文系副主任，教授）

陳恩泉（中文系漢語研究室講師）

12月18日（月）

復旦大学

濮之珍（中文系教師）

呉俗夫（外文系日語教研室教師）

（一）

第一次略字の発表とその成果

第一次の発表は大方の人民から大歓迎された。それはそれだけの理由があった。例えばその中の多くの部分をしめる略字はそれぞれ古いものは千余年来、もしくは数百年にわたって、歴史的に、すでに中国の民間において慣用されていた略字で

人民間においてはスムーズにそれを受け入れる地盤があったのである。又一部には、同業者仲間で共通の略字などもあり、その公認によってひろく歓迎されるといったことなど、これだけの略字がごく自然に民間に定着し、しかも繁雑な字画から解放されたという清新な空気が流れていたのである。例えば略字採用後の『人民日報』は、全体から受ける印象として明るくスマートな感じを受ける、それに反し台湾で頑固に守っている旧体の漢字による紙面から受ける暗い感じ、かたい雰囲気にくらべて、『人民日報』の全体から受ける感じはいかにも革新的であり、その上にやわらかな感じが溢れるようになった。そして文章をかく場合も、字画の簡略化によって負担が軽減されたこともまた非常なものである。これは単に国内の人民から歓迎されたばかりでなく、同じ流れを汲む日本の人びとにも大きな影響をあたえた。わけても日本人で中国語を学習する者にとってはすごく新鮮でスッキリとした感じがすると歓迎されたことはいうまでもない。そしてそれが知らず知らず日本文を書く場合にも、中国の略字の影響をもちこむことになりつつある。中国語学習者は、自分のメモなどに中国語の略字をふんだんに使っている人が多い。又そうでなくとも、一旦中国の略字の便利さを味わった人は、それを私用に供している人はすくなくない。例えば国立国語研究所長の林大氏など、「私のメモには中国の便利な略字を常用しています」というていた。これは中国語が日本に普及すればするほど、こうした現象はますます広まっていくことだろう。民衆は一旦その利便さを身につけたならば、為政者が声を涸らしてとめようとも、そんなことにはおかまいなしにどんどん広ま

っていき、日本の文字の中に中国の略字の影響が徐々に浸透していくことだろう。ましてや日本の略字と中国の略字の中で、その意味が全く同じであって、その字面がほんの一点一画の違い(別表参照)の場合など、その混乱は目に見てもはっきりと予見できるであろう。このようなことを中心にお互いに意見を交換したところ、会談した人びとはすべて私の意見に同意した。例えば北京大学の季羨林副校長、中文系教師2名の方、文字改革委の3人の専門家、武漢大学の中文系教授周大璞氏以下3人の教師、上海復旦大学の中文系教師濮之珍教授等々であった。とくに復旦大学の濮之珍教授の娘さんは、現在上海で日語を専攻しているが、いつもテストのとき、日中の漢字の一点一画の表現の違いに悩まされていると語っており、できれば略字中、同意では画微差の文字は統一したら、相互の学習者にとって、どんなに便利かわからない、と統一には双手をあげて賛意を表してい

た。こうした問題から1972年の郭沫若先生の意見について話し合いを行った。日本では先生の意見をもって、すでに日中両国の漢字統一の問題については、最終的な結論が出ている、と行って今更統一など言い出すことはおこがましい、とでも言いたげな論がある。これは小生の感じとしては、誠に事大主義的な考え方にきこえる。吹けば飛ぶような一現場の教師の悩みかも知れないが、小生のように、中国の略字が発表されて以来、日本人に中国語を教え、一方で華僑の子弟に日本語を教えてきて二十数年の経験の中で、学生とともに前記のような悩みを共にした者には、実地からくる具体的な悩みなのである。それをいかに権威者であろうと、その悩みを味わわない人にはわからないことである。郭先生の意見は、日本と中国との代表が正式に文字の統一を議題として討論したわけではないから何ら気にする必要はないと思う、という文字改革委の回答であった。またその席で、

同意・字形微差文字一覧表(一部)

日 融	中 融	日 突	中 突	日 梅	中 梅	日 減	中 減	日 困	中 困	日 免	中 免
刃	刃	拜	拜	博	博	高	高	着	着	呂	呂
船	船	真	真	比	比	実	実	低	低	良	良
巢	巢	浅	浅	微	微	写	写	忍	忍	恋	恋
搜	搜	信	信	別	別	寿	寿	派	派	鹿	鹿
即	即	扇	扇	步	步	修	修	边	边		
带	带	滞	滞	墨	墨	所	所	抱	抱		
弹	弹	抵	抵	每	每	食	食	房	房		
置	置	对	对	摇	摇	辰	辰	坂	坂		
丑	丑	炭	炭	隆	隆	禅	禅	繁	繁		
直	直	郎	郎	旅	旅	装	装	变	变		
底	底	德	德	凉	凉	台	台	胞	胞		
						单	单	冒	冒		

同意・字形
微差文字
一覧表
1979.1.31
初歩的調査

日中両国文字の統一への志向で組織された委員会（小柳勇委員長）が、日本の一角で活動していることもきいた。

日中両国の人名について。

日本では人名をつける場合、漢字を使うとすれば当用漢字1850字と2回にわたって追加した人名漢字120字で計1970字の範囲で選ばねばならないのである。時には人名登録の時、制限外にはみ出した漢字の場合、その修正を求める窓口の戸籍係りと届出人とのあいだにトラブルが起きることを話した。しかしその結果としては、日本人の人名が読み易くなった。小生のような名の文字は誰からも正式に読まれたためしのないこと、廓真と書いてハルマと読ませるのだから無理な注文である。その意味では日本人の名は合理化の方向に進んだといえよう。こうした話題に対して季羨林氏は次のような話をされた。「解放前私が外国の留学を終えてかえったばかりのとき、職がないので専門外の中文系の教師としてある中学に就任した。その時前任の老教師から、君が最初にクラスの授業にでかけるときは、出席をとる場合、読めない人名のあるときは、その学生の名はよばないで、とばして点呼し、さいごに生徒自身で名乗らせることだ。それをよみにくいのをムリに呼んで読みちがえでもしたら、この学校で在職中ずっと、あの教師は学力が低いと見下げられるぞ、と注意された」ということだ。さらにことばをつづけて「たしかに中国人の名まえには読みにくい字がよくあるのだ。現に私の側にいる彼の名は、私にはよく読めないのだ」と、中文系の嚴紹璽教師の「璽」の字はどう読むのかといわれ、「tang と読むのです」とご本人が説明をして大笑いだった。その話題の中で、今の中国人の名前は自由に漢字をえらんで命名することになっている。このことは中国の文字改革の面からすれば、大きな抜け穴になっていることはたしかだ。この話題から日中両国の人名の呼び方に及んだ。両国では伝統的に、

日本では中国人（地名を含めて）漢字の音読みでよび、中国では日本人を中国の発音で呼ぶならわしとなっている。ローマ字化の原則（12月発表1979年1月1日より実施）によれば日中両国の固有名詞のそれぞれのよび方によってすれば一応それでよいのだ。しかし事実はそううまくいかないことはよくわかっている。『北京周報』では、実施にあたり、日本語版を除くとわざわざことわっている。とくに文字改革委のひとり是这样いった。国際的に固有名詞、とくに姓および名前で日本には和字を使っているのが少ない、そのとき中国では今までの習慣上どうよぶか困っている。よみ様がないからである。とくに中国側では日本人のみならず、朝鮮人にも又同様な問題があると言っていた。

中国の漢字のローマ字思考化の問題

ローマ字化は、中国語の国際化にとっては大いにその将来性を保証されたとも言えるだろう。勿論中国語のもつ四声の問題、同音異義語の問題等々困難さを含んでいるとはいえ、中国のローマ字化のことから日本のカタカナとひらがなを想起する。漢字をもとにわが日本人の祖先が文化遺産としてこの二種類のかなもじをのこしてくれた。この二種のカナもじによって日本語の現代化の為に役に立ったかは、はかり知れないものがある。あのほう大な外来語をカタカナで受け入れ、ドン欲に日本語の語彙をひろげつづけていくことができるのである。しかしその反面、日本語の国際化においてはむしろ障害になっている一面を見のがすことはできない。そのいみで、中国が注音字母を採用しないでローマ字化にふみきったことは中国語の国際化にとり、また中国内での普通語の普及にとっても、一挙両得の策といえるだろう。ただ四人組のかきまわしによってローマ字化の大事業が途中で一頓坐したことは惜しみてもあまりがある。今中国ではことばの現代化の為に、ローマ字化を小学校に根づかせるために全国的に壮大な規模でこのことを推進しつつある。その方策とし

て、都市はとにかく、農山漁村においては、まず小学校教師自身にローマ字化のキソの徹底化をはかり、教師の再教育に莫大な力を注いでいるとのことであった。

さきにのべた日本の和字の問題についてふれた。それは漢字の移出先の日本で生れた和製漢字たる和字は漢字の祖国中国に里がえりしても、そのよび名たる発音がないのである。たとえば日本の榊原とか辻とか峠といったような姓の人が訪中しても、中国の習慣により日本人の姓をどうよぶかというときにハタと行きづまってしまう。この際中国側で適当な発音を正式につけてもらう。言うなれば和字の市民権を中国で与えるということにはならないものだろうかということである。現に新華字典では、私の知る限り、ただひとつ「畑」という字に tian という発音がつけられている。このわくをひろげるわけにはいかないものでしょうか？というはなしに対し、中国側の先にあげた人々は「ウーン」といったまま、「それは一理あることだネ」ということになった。もちろん私はせっかちに要求したわけではなかったのである。もちろん中国側で市民権を与えたからといって日本側に不利になるとか、という問題は何もないと思うのである。もしそれが可能ならばたった一文字でなく、私の初歩的な計算でも約200字から300字位いはある和字が、中国の字典の中に加えられることを夢みているしだいなのである。(この初歩的な資料は季羨林副校長に渡したところ、最近になって文字改革委に渡して研究させていると同氏からお便りをいただいた。ちなみに同氏も文字改革委の一員である。)

(二)

次は第二次略字の発表にまつわるはなしである。文字改革委員会の委員の方々がこもども語るところによると、この発表にあたっては、慎重審議、時々ひとつの略字について一日も二日も激論を闘わして、ひとつひとつをきめたという。そうし

てみんな大いに自信満々で発表したのだそうである。ところが発表されるや中国の全国から不評判の声が圧倒的につよく、委員たちはその声におされて、文字通りあたまをかかえてたのだという。たとえば展という字を尸としたところ、多くの書家などから、あの字は一体何だ。われわれは漢字の「間架結構」という文字のすわり、つり合いを重視する点からいって、全く問題にならぬ。まん中に広場のような空白をおいて、何という不恰な字だなどとお叱りを受けるしまつ。又ある大幹部は、元来、私の姓名を略字で書かれることに非常に不愉快をおぼえるとか、もう散々な不評であったという。発表后いちはやく採用した『人民日報』も、これを使うことを中止してしまった。今では『北京日報』とか、地方紙とかに採用されている。もちろん、これは決定案ではなく、試用中なのである。委員のはなしでは尸の字は中国のある地方で相当古くから使われていたので、これはむしろ歓迎されると思ったのが、そうでなかったという。北京飯店前の道路標識とか、広州の菊花展とかにちょいちょい第二次の文字を見かけた。地方ではこれに対する意見をくわしくきくひまもなかった。

こうみてくると、中国では漢字に対する見方はその社会性がいかにつよく、又その歴史的な伝統というものが非常に根づよいということである。そのもっとも大きな原因は、漢字自体のもつ意味というものがきまっていて、一字を見ることによってそのもつ意味が直観できるという長所への魅力なのである。勿論こうした一種の信仰みたいなものは、中国人のみならず、日本人の中にも根づよくあるということである。ここに文字改革が言うべくして、中々そう簡単に実行できないということになるのである。またこの魅力の故にこそ数千年来の歴史を感じさせるのもである。日本人が日本語をローマ字で書かれたのを読むとき、何となくもどかしさと味気なさを感じるのと同様に、中国人民の心の中には漢字がわれわれよりも

一層よりこく血となり肉となっているからであり、このことは日本人民のひとりとして、つよく共感をおぼえるものである。

(三)

なおここに特に印象深かったことのひとつに、北京語言研究所長の呂叔湘氏が小生に対し、「中国語について、君の感想はいかに？」という質問であった。私はあまりに一般的であり、又大きな問題でもあるので一しばらく考えた上で次のように答えた。小生が解放前中国語を専攻していたとき、あそこがれの北京を訪問したことがあった。そのとき北京停車場におり立ったとたんに、周囲の民衆のことばが、音楽をきくような北京官話のひびきだった。とくに女性の鈴をふるような官話のひびきは、中国語のメッカに來たなあと胸をおどらせたものだった。勝手な質問にこたえて習った通りの発音で返答がかえってきたことを思い出した。それが解放後は、そうしたいわゆる北京官話特有のニュアンスを感じさせない普通話（グオフア）が街頭にみちみちていること、そして解放前には夢にも考えられなかった地方の方言地区でも普通話で質問する限り普通話で答えがかえってくるので、中国語学習者にとっては、中国数億の人民がみんな気のおけない友人に見えてくる、といった……このように解放後の中国語の様がわりを感じると答えた。すると、さも満足そうに呂先生はうなずかれた。またいわゆる北京官話では内容空疎なつきあいのことばの多いのに対し、普通話は実に簡単直截でキビキビしており、ことばに新語つまり革命をめぐる新語や社会科学に属することばが非常に多いことは、新中国として当然の反映といえる。

ことばに階級性なし。という命題については、上海の復旦大学で相当の時間をつかって意見の交換をした。

四人組はことばには階級ありといって、解放以来中国の語言関係者が17年間にわたって積みあげてきた一切の業績を抹殺しようとした。かれらに

はふたつのネライがあった。ひとつは現代漢語詞典（試用本）を1971年改訂中に、「修養」ということばは階級性があるといって編者に削除せよと要求したり、「王道」ということばに対して「日本帝国主義的王道楽土」とつけ加えて、このことばに帝国主義の帽子をかぶせたりした。ふたつめは語言学界の17年間の成果をつぶして文化独裁主義を強行し、文化虚無主義をもちこもうとしたのだ。つまりかれらは、ことばそのものに階級性ありなどの非合理的な言い方で、ことばと思想とを混同させ、ことばそのものには階級性ありと言いくるめようとしたのである。ある階級中で独自につかうことば、つまりその階級間での習慣語、日本の場合で言うなら宮廷用語などもその例としてあげ、たとえそれが貴族間にのみ用いられたとしても、それはことば自体に階級性を帯びているのではなく、その階級の中での習慣用語にすぎない。そしていかなる習慣語といえども全民的語彙の範疇からとび出してしまうわけでもなく、日本の宮廷用語は依然として日本語という範疇からはみ出しているわけではない。階級性ありとは、ことばを道具として組み立てられた体系的な思想そのものにこそ階級性を反映するのであって、個々のことば自体の階級性などはありようがないのである。こういったことについてお互いに意見を交換することができた。（これは主として上海の復旦大学において。）

(四)

國務院教育部は普通話ならびに漢語ローマ字化の強化について、全国にむけて、大要次のような指令を出している（上海発行の「漢語拼音小報」78. 11. 1付）。

普通話の普及ならびに漢語のローマ字化は、教育革命にとって、第一の重要な内容であり、学校は、これらをおし進める重要な基地である。そして広汎な教師、学生は、これらを普及する重要な勢力であるから、各地区の教育部門は、これらの

しごとを重視せよ。

普通話、大いに提唱し、重点的に推行し、逐次に普及するという方針をとり、こんど5年乃至8年間に、普通話をおしひろめるようにせよ。そのためには、1978年から5年以内に、各級、各級の学校の語文系教師は、普通話の授業を基本的にマスターすること。その他の各教科の教師も、逐次、普通話を使って授業すること。学生は、授業中もしくは集会において、原則的に普通話を使用すること。こうして8年以内に、各級、各級の学校では、原則的に普通話を普及すること。

以上の要求を、北方話の地区の学校及び方言地区の都市部ならびに重点学校においては、その実現期間をくりあげて、達成しなければならない。

師範系学校の学生は、在学中以上のことをマスターし、卒業後は、普通話によって授業をできるようにすること。

なお、漢語のローマ字表音は、文字をおぼえることと、普通話を習得することなどにとって、有力な道具であり、わが国の漢語ローマ字化の基礎なのである。だから、中学、小学では、いずれも、漢語ローマ字表音をまじめに教え、これを語文教授の内容の一部として、十分に漢語のローマ字化という役割を発揮するよう、つねにローマ字を運用し、考慮しながら、一旦とだえたものを、生きかえらせるよう努力せねばならない。

なお、通知は次のように指摘している。

普通話をおぼえ、漢語ローマ字表音をものにすることは、教師としての基本的な学習なのであって、各地では、教師自身の資質を高めるよう、緊急に対策を立てること。

さいごに、国語の教科は、普通話が主要な授業内容であって、普通話をうまくマスターさせ、文字をおぼえ、作文し、朗読したり、問題の回答など、反復学習し、反復練習するなどして、漢語ローマ字化の役割を十分に発揮し、正しい発音を絶やすことなく、同時にいろいろな用式をとり入れ、

課外での練習と運用を重視すること。いろいろな会議を催し、スピーチ・コンクール、詩歌の朗誦、文芸だしものなどでは、とくに普通話を強調し、各地では、具体的な状況にもとずいて、定期的、もしくは不定期に、普通話授業の実地参観を度々催すべきである。

教育部の通知が伝達されるや、広汎な教育工作者は、文字改革の事業に対し、大いに熱意を燃やしはじめたのである。

このため、上海市では、'78年9月15日、市教育局主催による、普通話推進工作会議が開かれた。出席者は、上海各地区の教育部門責任者、各種、各級の学校代表など60余名であり、かれは一致して、教育部の要請にこたえ、8年の期間を、3年もしくは5年くりあげて達成しようと申し合せたという。

なおこの「漢語拼音小報」は、創刊以来100号を越え大衆から大歓迎されていたものを、四人組のためムリヤリに停刊させられ、12年のあいだ、沈黙を強いられていた。このほど、つまり'78年11月1日付をもってやっと復刊第1号を発行するにいたったよろこびを、次のようなことばで表現している。

“莫道浮雲終蔽日，嚴冬過尽綻春蕾”，という書出しで、われわれは満腔のよろこびをもって、みなさんに告げる!!林彪、四人組の迫害により、12年間も停刊させられていた「漢語拼音小報」は、今や華主席、党中央の、かなめをつかんで国を治める、という戦略方策に導かれ、雪と氷におしひしがれた作物が、春の陽ざしのぬくもりを受けて、芽を出し、生色をとりもどしたかのように、新生を勝ちとり、ここに再び読者に相まみえることとなった、とのべている。そうしてさらに編集者は次のようにつづけている。

われわれは、毛主席の「文字は必ず改革せねばならず、世界の文字に共通するローマ字表音化の方向に行かねばならぬ」「すべての幹部は、普通

話を学ばなくてはならない」というねんごろな教えを守り、周総理の、わが国の当面する文字改革の三つの任務——漢字の略字化、普通話の普及、漢語ローマ字化方案の推進——という重要な指示に従ってこんど勝利を目ざして前進する、と意気高らかにうたいあげている。このことばを通じて察しうることは、四人組が、中国の語言界にも、いかに大きな被害を与えたかということである。これに類することばは、訪問先の北京は勿論、広州でも、口を揃えて語られたのである。とくに問題なのは、方言地区、とりわけ農山漁村には、こうした語文教師が、絶対的に不足している、ということである。したがって各地区の教育当局は、それぞれの地区の実情に対応しながら、国務院の教育部の指示の実現のために、それぞれ具体的な目標を立てて、とりくんでいるというのが現状なのである。

中国における日本語学習についてひと言ふれておく。解放前、私が大連で教えたことのある、現在の北京第一外語学院の日語教授崔士彦君が、日本の一橋大を出たあと帰国した。その崔君が北京飯店に二晩にわたって私を訪れてくれ、北京などにおける日本語教育の状況をきくことができた。要点は「生きた日本語をマスターさせること」であるという。したがって大学の三四年クラスには、日本の新聞記事など、どしどし採用している、とのことである。これは私が帰国してからのことであるが、駐日中国大使館と神奈川、静岡両県当局との交渉の結果、各県下の高校教師、神奈川5名、静岡9名、現職のまま2カ年をきって、それぞれ出張の形で国内の給料をそのまま支給するほか、中国側では各人に月500元の給料を支給することに決定し、この3月赴任する予定である。500元といえば鄧小平副総理の月給400元とくらべて、いかに中国側が、日本語学習に熱を入れているかの一端を伺うことができる。この人たちはいずれも、10年～20年という油ののりきったベテラン教師ばかりで、

中国の重点大学ならびに各地の外語学院に配属され、実地の授業と、教材編集にあたるのである。

II. 暨南大学について

学科 理科＝数学、物理、化学、生物、

(四年制)

別に医学院(五年制)

文科＝中国語文、歴史、新聞、

経済、外国語(英)

月謝不要

学生全寮制

学費 食費 { 19元 小使い10元以内
計 30元～40円で十分である

暨南大学副校長 王越先生と対談。

対談内容

暨南大学の沿革の概要。

在外華僑の子弟の為の大学であって、四人組の時代廃校同様に授業を停止されていたのを、四人組打倒以後、方々に分散していた教授陣をよびかえした。一部は中山大学の一角に身を寄せるなどしていた。’78年に再開にふみきり、本年’78年復活第一回生を収容して授業を再開した。

横浜山手中華学校の沿革の概要。

とくに1979年3月の高校部卒業予定者2人が暨南大学に進学希望(帰国更に2名追加)であることを報告。王先生は、それは大歓迎であると述べ、中国語が不十分ならば、校内に補習学校があるので、入試を恐れることなく、在学中、とくに英語と理科系の学科に身を入れて学習しておくよう、懇切に話された。特に学生本人は勿論、父兄にも実状をよく話して心配しないようにとの伝言があった。学生は在学中、帰省も自由、又卒業後も就職は自由であるから、親もとに預けたと同様に考え、親は安心して子弟を送りこんでほしいとのことであった。横浜の学校のことについては大要は知っておられたようである。それでも1952年来、

国民党反動と闘って今日に至ったこと。国語（中国語）の学習に励むのは勿論、日本語の学習にも身を入れてきたこと。これは特に故周総理が、華僑に対し現地のことばをよく学習せよと指示したことが、大きな力となり、今もそのことばはしっかりと活かされている。また四人組が華僑を敵視し、帰国華僑を差別したときは、いろいろな形で留日華僑も苦痛を味わったこと、とくに機会ある毎に日本国籍をとるように、半ばつよく要求されたときの愛国華僑たちの失望ぶりを語った。かれらは外国に居住し乍も、心は常に祖国を思っている。1949年の革命をへて、はじめて、たよりになる祖国が成立し、それをうしろ盾として、力強く生きようとする者に、その在住国に帰化せよとつよく言われたのでは……とくやしがっていた。それが四人組の打倒によって、毛主席の華僑政策である本来の姿にかえり、帰化するもよし、国籍を保持しつづけることも歓迎するようになったので、愛国華僑たちはどれだけのよろこびを味わったことか。

また周恩来総理の亡くなられたとき、在日華僑は東京で大々的な追悼会も催そうとしたとき、四人組の指令でとりやめとなった。にもかかわらず、横浜の愛国華僑たちは団結して、横浜の地において盛大なうちにもしめやかな追悼式をもった。天安門事件が今や愛国的行動であったということが証明された今日、横浜の学校を中心とする華僑たちの行動が、改めて評価されているのである。一方横浜華僑のみならず、留日華僑のうち本国に帰国した華僑もしくはその親類筋で、国内の機関にあった幹部のうちには、ただ在外華僑に連絡があるというだけで、黒いスパイの線につながるとして左遷されたり、迫害を受けて、今もって病院にある者まで出した実状についてはなしあった。と同時に四人組の打倒のおかげで、建国当初以来のまともな華僑政策に復帰したことは、在日華僑をいかに勇気づけたかということ話を話した。私

は全然予期もしていなかったのに、広州に来てみると、暨南大学からわざわざ王副校長が出て来られたことに対し、27年にわたって横浜ならびに在日華僑の多くの人たちと肩をならべて、華僑子弟の教育について、一緒に闘い、共に悩み、よろこんできたことが、今ここにこうした形で、お互いに胸襟を開いて語り得たこと、とくに日本の大学にしか進学できない、しかも限られた理解ある私立大学にしか進学できずに悩んでいた本校の高校部卒業生たちが、母国の国立大学へと進学できるみちが開けたことに対し、わがことのように嬉しく思った次第である。

追記、私が帰国して間もなく、去る'79年1月5日から1月23日まで、わが山手中華学校長馬広秀氏、前校長鳥勒吉氏、神戸中華学校長李万之氏と同校教頭徐世興氏ら4人が僑務委員会の招請に応じて、北京各地を訪れ、とくに暨南大学へも訪問した。そのときの話によれば、この大学は、同じ広州の中山大学よりも更に規模が広大で、構内に小山あり森林ありで、全くぜいたくすぎると感じたという。設備も国費以外に、在外華僑からの施設の現物寄付が実にりっぱで、現代の最高の実験施設が完備しているという。

※

〔付記〕 以上の報告は、ごく限られた紙面なので、その要点のみを記したにすぎない。全体として対談して下さった方々は、いずれも貴重な体験の持ち主ばかりで、下世話でいう苦労人ばかりであった。だから私ごとき人間に対しても、実に暖かく接して下さり、どなたも文字通り胸襟を開いて、自由に対談して下さった。そして今こそ中国の方々は思想を解放されたのだと直感した。なぜなら私は幸い中国語だけで、一言も日本語によらず、ましてや通訳を介することなく、さしで対談できたので、どなたも、あたかも長年の知己を遇するが如き親愛感溢るる雰囲気の中で、相互に自由におしゃべりさせて頂いたことを感謝している。